

受講番号 18040 学校名 梶原高等学校 氏名 坂本 万礼

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年(習熟度上位クラス) 生徒数 11名
 科目名 英語 単位数(授業時数) 3時間 使用教科書名 Surfing English Course

クラスの様子・特徴

1年生を4月当初の課題テストの結果(点数と解答の内容)からわけた習熟度上位クラスである。素直だが、とてもおとなしいクラスであり、授業に限らずホームでもほとんどの生徒が積極的に発言することはない。

問題の確定

英語の基礎となる単語や熟語などの語いや中学既習の文法事項が定着していない。

予備調査

A 授業の観察

とても静かで、授業もよく聞いているように見えるが、全体的に消極的なクラスである。発表も手があがることはほとんどなく、音読の声も小さい。

B 生徒による授業評価

年度当初の意識調査の結果、英語が好きだと答えた生徒はどちらかといえばを含め2名、どちらかといえばを含め嫌いだと答えた生徒は10名、普通は3名だったが、英語の必要性を感じている生徒は10名だった。調査対象:1年生全17名(うち2名欠席)

C 学力データ

4月段階での中学既習内容についての課題テストでの平均点は40点台中盤であり、うち50点以上は4名であった。限られた範囲のテストであったが、基礎的な単語が書けていなかった生徒が少なかった。また、動詞の活用が定着していない生徒もいる。

リサーチ・クエスト

素直だが、全体的に消極的なクラスで、単語理解や習得のための工夫、音声指導を充実させることにより、わかる喜びを実感させ、授業に積極的に参加できるようにするにはどうすればよいか。

仮説・実践・検証

仮説1

カードを用いてリズムよく単語を覚える活動やクイズ形式で単語を覚える活動を行えば、語いの習得と積極的な授業参加の助けとなるのではないかと。

実践1

・カードを見せながら発音を聞かせた。
 ・カードを用いて発音を練習した。
 ・カードを用いて意味やアクセントを確認した。
 ・カードを利用して既習の単語を繰り返し確認した。

検証1

板書をしての語い確認よりも反応がよく、カードを提示するタイミングがあってくると、しだいに声がだせるようになった。アンケートの結果、カードを用いての語い確認や発音練習について「わかりやすい」と回答したものが8名「どちらかといえばわかりやすい」と回答したものが3名で、全員がカードの利用に対して肯定的であった。

仮説2

教科書に出てきた新出単語および重要単語を、毎回テストすれば、確実に語いを増やしていけるのではないかと。

実践2

・新出単語およびその課の重要な単語のテストを毎回時間実施した。
 ・1学期は毎回形式を変えず用紙に書かれた問題を解く方法で実施した。
 ・2学期は「英語を読み英語で書く」「日本語から英語を書く」「英語を読み日本語を書く」「英語を見せ日本語を書く」などさまざまな形式で出題した。
 ・既に学習が終わった課の単語も範囲に組み込み、繰り返しテストすることで定着を図った。

検証2

1学期は毎回満点をとる生徒も見られ学習のよいきっかけとなった。2学期は出題方法の変更並びに動機付けの弱さのため最初は得点も下がっていたが、重要性を繰り返し話すなど徐々に取り組む姿勢に変化が見られ2学期前半よりも後半、元々平均点が満点だった生徒を除く全員の生徒の平均点が上がった。また、課題テスト・定期試験の単語正答率が40%→61%→75%と、語いサイズテストの結果も11名中9名に伸びが見られた。

仮説3

教科書に出てきた英文をフレーズごとに意味をとらせ、まとまりに注意して音読をすることで英語理解の助けとなるのではないかと。

実践3

・SVを各自確認させた。
 ・フレーズごとに区切る活動を行い、意味をとらせた。
 ・全体でまたペアでのシャドーイング・同時通訳を行った。
 ・重要な文については音読筆写を行い、音からだけでなく、実際に聞く読む書くことを通して単語理解・英語理解へとつながった。

検証3

アンケート結果によると、無回答の1名を除く全員がSVの把握ができるようになったと回答した。また、チャックごとのまとまりで意味をとらえる活動が効果的だとする生徒は全員であった。ペアでの音読活動が効果的だとする生徒は9名、音読筆写が効果的だとした生徒も9名であった。また、活動への取り組み姿勢もよく、ペアでの音読活動では全体での音読以上によく声が出せた。

研究の成果

単語カードを使用することで視覚的にも効果が得られ、以前よりも声のでるようになった。単語テストは形式を多様化して実施した。大変だが勉強になる、勉強のきっかけとなるという生徒からの意見を聞くことができた。また、定期試験の単語正答率にも伸びが見られよい効果が出たことがわかる。これらの実践に関するアンケート結果を見ても、ほぼ全員の生徒に支持されていることがわかった。チャックごとに英文をとらえる活動はわかりやすく意味をとらえやすいという声があり、英語理解の助けとなった。音読でのペアワークも生徒の主体的な取り組みへとつながり、授業が活性化した。

今後の授業改善の課題

これらのさまざまな活動によって、英語が前よりもわかるようになったとのアンケート結果がでたが、全員ではない。今後は、全員の生徒に到達目標とその方法を理解させた上で、実践していかねばならないと考えている。また、単語テストや音読筆写の活動がその場限りとならないよう、以前の学習内容に再度焦点をあてる、復習するなどし、定着をはかりたい。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

0889-65-0181

電子メール

mare_sakamoto@kt2.kochinet.ed.jp